

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'84
7月
号外

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11
婦選会館内 T151
振替 東京九一九一八九一
発行 一九八四年七月七日

共修へもう一息！ 六・一六集会報告

文部省はやっと家庭科のあり方を見直すことを決め、「家庭科教育に関する検討会議」がつくられました。その初会合の前々日の六・一六集会は、学校のいそがしい時期にぶつかって「出席したいがどうしても都合がつかない」という連絡があいつぎ、出席者は50名にとどまりましたが、報告は充実し、NHKニュースセンター9時とフジテレビの取材もあって、検討会議への要請文は盛大な拍手によって採択されました。

報告者

☆ ☆ ☆ ☆ ☆
衆議院議員 江田五月さん
参議院議員 久保田真苗さん
生活コンサルタント 金谷千都子さん

これからの運動の提案は男性世話人の大嶋せいさん。

ぜひとも男女共修に。高校「家庭一般」だけでなく中学「技術・家庭」も見直しを。そして早期実施を。そのために署名運動を継続し、検討会議委員一人一人に働きかけよう。マスコミにも積極力に働きかけ、各集会でアピールしようと力強くうったえました。(国会報告については夏号6・7ページを参照して下さい。もっと詳しく知りたい方には議事録のコピーを実費でお送りします)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

司会 第一部 半田たつ子
第二部 芦谷 薫 持田ナミ
記録 梶谷典子 馬場洋子

もくじ

共修へもう一息！六・一六集会報告	(1)
水色パンフができました	(1)
検討会議委員さま	(5)
文部大臣と面会	(5)
NHKニュースの窓で	(6)
世話人会報告	(7)
連絡会報告	(8)
お願い	(8)

水色パンフが できました

中学での共修をすすめるための新しいパンフレットができました。去年の交流集会の報告をもとにして各学年、各領域での実践例を新たに集めたものです。

すすむ男女共修 いま技術・家庭科で！と題して水色の表紙、B5版で32ページ、定価は三百円、送料は一七〇円です。どうぞ積極的にご利用ください。

第一部

共修問題いま国会で

江田五月さんは夕方からの岡山での集会に出席のため、2時24分の新幹線に乗らなければいけないということで、一時半に開会してすぐに話していただきました。

【江田五月さんの報告(要旨)】

今、教育はおかしなことになっている。教育改革に責任を持つべき文部省と日教組は対立ばかりしていて何かを生み出す方向に進めないでいる。自分としては、教育には素人だが、何とかいい解決をめざしたいと思って文教委員になった。これまで七回質問したが、なるべく具体的な提案をすることになっている。文相は自民党タカ派ではあるが、同世代なので、それなりに話はきいてもらえるものと思っ

て努力している。

四月十一日の委員会で高校の家庭科女子のみ必修が差別撤廃条約の批准の障害になると認められた。文部省は「外務省が条約に抵触するというのなら、批准の妨げにならないよう努力する」という態度。外務省からは、

中学校の家庭科のあり方も条約に抵触するという見解が出された。

「検討会議」をつくって検討するというので、せめて委員の半数を女性にするよう提案したところ、委員16名中7名が女性になった。それなりの成果だと言えるだろう。これからこの委員に対して大いにロビー活動をやり、洗脳してほしい。

六月八日には共修をすすめる会代表と森文相との会見が行われたが、「自民党タカ派の文相」という限界をどう突破するか、これからの運動にかかっている。

男女共修は「重い」仕事だ。運動をしている人たちの後にどれだけ教師や父母がいるかと思うと、道は遠いと感じざるを得ない。「あの男の子たちに刃物や火や針を持たしたら私たちの命があぶない」という教師もあるという。実際にそんなことはないのだが、事態は甘くない。相当な覚悟でやらなければならない。

教育のあり方、生活のスタイルを根本から変え、ずっと続いて来た男性中心の歴史を本当の人間の歴史に変えて行く課題に取り組んでいるのだという気持で、じっくり腰を落ちつけてやって行きたい。

家庭科を被服と調理に矮小化するのではなく、

家庭生活をどう営んでいくか、家庭と社会のつながりはどうなっているか、人間と自然とのつながりはどうか、人間が生きていることとはどういうことを学ぶ、みずみずしい生活教育につくり変えていくことを考えなければならぬ。

「共修へもう一息」というが、最後の一息は長い長い一息であると覚悟をきめてがんばってほしい。私自身も息長くへこたれずに取りくんで行くことを誓います。

☒

出席を依頼した粕谷照美さんはやむを得ない用事で地方へ行かれて欠席、久保田真苗さんは会議のため遅れられるということだったので、半田さんが議事録をもとに国会でのやりとりについて報告し、中学の家庭科のあり方が条約に抵触すると認められたことの意味は大きいと指摘、森文相が「男女がお互いに理解し、尊敬し合っていくことが家庭科教育の原点」と発言したことを、これから武器として使っていくと呼びかけました。

☒

次に和田典子さんから、世話人会と四十八団体の代表が文相と面会したこと(8ページ参照)及び各地の状況について報告がありました。

外務省が主要八ヶ国について調査した結果、全部が家庭科のカリキュラムは男女同一だった。自信を持って、力を合わせて行こう。

☒

続いて再び和田典子さんの報告。

「選択必修になるらしい」「組み合わせる手は格技らしい」という情報があり、そうなれば殆んど現状のままにできるので、樂觀ムードも流れているとのこと。

☒

次に遠方からの参加者が次々に発言しましたが、各地の状況は次号でお知らせします。

第二部

いま、どうする？

条約10条が審議されているとき、イギリスの代表(男性)の提案で equal ということが可能な限り same に直すことになったが、日本の高橋展子代表のところへは政府からとんでもない訓令が届いた。「同一の教育課程」をもっと日本の現状に合ったフレキシビリティのある表現にせよ」ということだった。高橋代表は仕方なく提案したが全く相手にされなかった。

決算委員会で質問する前に外務省に条約の解釈についてきたところ、「文部省の訓令

ここで、「同一のカリキュラム」「実施期日」について必ず一札をとらなければならない。

文部省があまりぐずぐず言えば、批准をのばすということもあり得るが、他省が努力しているのだから文部省だけ義理の悪いことはできないだろう。

大臣や役人はすぐ代るから、口約束や国会答弁位では絶対だめ、公文書のかたちにしなければいけない。国会の方で一札をとる工夫をしてみたい。

問題としてうったえたと理解されやすいのではないかということでした。

【金谷千都子さんのお話(要旨)】

今、経済的には自立できても、生活を維持するという面で全く自立していない男性が巷に溢れている。そういう男性が年とって一人になった時は大変問題だが、中年の单身赴任者にも問題が起っている。大手企業は、マスコミで言われている以上に单身者対策に頭を痛めている。なれない家事が单身者には大変な負担になり、ストレスを起す。

結婚相談の仕事をしているが、今は男の両親の方が女の親よりあせっている。「世話をしてくれる人」が早くほしいのだ。そして婚姻期間中に男が自立していないことにあきれ

て女の方が逃げたという例が多い。
今の家庭科のあり方が続くなら、この男のみじめさは続くだろう。

小さい時から体で覚えたことは忘れない。自分の生活を維持する力は小さいうちに身につけ、続けて行くことが必要。

今の若夫婦は出産の時それぞれの実家に帰ってしまうことが多い。新しい生命を自分たちでつくったという実感が生まれないのではなからうか。

親——特に男の子の親に問題があると思うが、ある程度の年齢になってしまった人はもう説得できない。学校教育の中で、男の子に自分のことは自分でする態度を身につけさせることが必要だ。

自分の生命を自分で再生産することを身につけてこそ一人前だ。そういう一人前の男と女がよいカップルとなる。小学校から通して男女共修で家庭科を学ばなければいけない。ニューメディア時代になれば、自分の生活の管理をもっとしっかりやらなければならないだろう。

☒

大嶋せいさんの運動の提案(1ページ参照)のあと、更に各地の報告が続きました。

報告から次のようなことがわかりました。

◆「女子のみ必修はもうあり得ない」ということがわかっていない人が多い。

◆共修を願いつつながら、圧力に負けて署名を遠慮したり、共修について発言できない人もある。

◆「選択必修になる」という情報は広く流れている。

◆「家庭科問題は財界がバックアップしてくれないから文部省は後退を余儀なくされる」などと言われている。

最後に文部大臣と検討会議あての要請文を採択しました。署名用紙の要請文に更に、検討会議ができて喜ばしいこと、「男女選択」「必修選択」でなく「男女必修」にすべきこと、中学での男女共修もぜひ必要であること、条約に従って施策を「遅滞なく」推進すべきことを書き加えたものです。

要請文は十八日に文部省に届けました。

(まとめ 梶谷典子)

Hさんの感想

共学の方角を進めようとする家庭科研究者の動きに対して、「私たちは国策にそった事をしていいるのだから安心よ」と一線を画し、且つ非難した人々が居たことをありありと思い出しました。「女子必修」の請願署名の動きはそれらの人びとによって進められているのでしょうか。対抗するのではなく、それらの人びとも説得して、まきこむことが大切なことなのでしょうが、若い人々の真の幸福と豊かな成長を育むことより、国策に沿うことで保身をはかろうとすることが大切な人たちの存在は何と考えるとよいのでしょうか。
(短大教師)

家庭科教育に関する

検討会議委員さまる

家庭科のあり方を見直すための「家庭科教育に関する検討会議」は六月四日スタート、委員は次の16名です。

麻生 誠 大阪大学教授

伊藤 央子 筑波大学附属坂戸高等学校教諭

小笠原ゆり 大妻女子大学教授

久保田キヌ 東北学院大学教授

斉藤 弘 国立教育研究所第四研究部長

鈴木テル子 東京都立教育研究所主任指導主事

鈴木 寿雄 横浜国立大学教授

千石 保 (財)日本青少年研究所長

西山 靖子 長野県教育委員会指導主事

縫田 晴子 日本放送協会解説委員

早川 克己 日本経済新聞社編集局婦人家庭部長

藤井 敏子 愛知県東浦高等学校校長

二本 武 東京都立母子保健院長

古松 彰 東京都立三田高等学校校長

間宮 武 共立女子大学教授

湯沢 雅彦 お茶の水女子大学教授

(肩書きは文部省の発表によりました。)

この会の趣旨は「今後の家庭科教育の改善に資するため、高等学校における『家庭一般』等の在り方について検討を行う」ことなのだそう。文教委員会の答弁でも感じられた通り、文部省は中学については見直しはしたくない様子です。

「男女別の学習領域の指定」は確かに形式的には「女子のみ必修」よりは差別的でないように見えますが、義務教育である中学で男女違った取り扱いをして伝統的な性別役割意識を植へつけることは大きな問題です。また高校で共修ができない理由として、しばしば中学で男女違った学習をしていることが挙げられます。(本当はそんなことは理由にならないのですが——女子も学校によって違った領域を学習しているのですし、家庭科は数学や語学のような積み重ねを必要とするものではないから)中学、高校とも、完全な共修を早期に実現させるよう要求して行きましょう。

世話人会では、委員あてに手紙を出して会の基本的な考え方を伝えています。「家庭科、

男子にも」の本やパンフレットも送りました。これから一人一人に連絡をとり説得を続けます。

皆さんもどうぞ手紙を出して下さい。またあらゆる縁故をたどって話し合ってみて下さい。共修について具体的な体験のある方は特によろしくお願いします。体験談は抽象論よりも説得力がありますから。父母や生徒の声を伝えることもいいと思います。

(梶谷典子)

森文相と面会

——二〇一七名の

署名と共に——

馬場 洋子

六月八日、前々から申し入れていた森喜朗文部大臣との面会が実現。会の菅谷、石川、梶谷、中嶋、和田、馬場が出席した。

この面会に骨を折ってくださった江田五月議員の事務所から会に連絡が来たのは六日。「家庭科教育に関する検討会議」が四日に発足してすぐのことだった。国民の意見を広く聞きますよ、という姿勢かしら?

しかし、議事録などで見知っていた大臣とは大(?)違い。一五分の面会を終え、一同、「情

けないネ……」の一言。

大臣「個人としては、女子だけ必修にさせることは今でも差別だとは思わない、妨げにならないと思っている。外務省が妨げになるというから、文部省としても検討することは必要でしょう。」「わたしに言っても無理。大臣というのは教科書さえ変えられないんだから。検討会議のメンバーに言ってもらった方がよい。」

男は仕事、女は家庭という固定された性別役割分担をなくすためにも家庭科が男女共に必要などと言うと、まるで拒否反応。

ただ、今の家庭や子供の状況からいって、生活を大事に考える場として家庭科は男女共に必要な教科です、ということには、「今の言ったことはよく伝えておきます」と大臣。

この日、会と家教連を合わせ一一〇一七名分の署名を持っていった。その厚さ約30cmの署名を受けとって、大臣「重いですね」と一言。その重さの実感、忘れないで下さいね、という思いで、面会を終えた。

●職業教育課長にも面会

その後、大臣の口添えで、職業教育課長阿部憲司氏に会った。

検討会議では、高等学校における「家庭一般」等の在り方について検討、となっている

世話人会報告

△五月十九日▽

●検討会議の委員について申し入れをする。婦人問題として48団体・婦人有識者・家庭科教育の団体から具体的に名前を出す。

●中央公論五月号「男女雇用平等法は文化の生態系を破壊する」という論文を掲載。

●男性向リーフの検討。「男から男たちへ」家庭科の男女共修をすすみましょう」に決定。

●会報臨時号七月七日発行。内容は六・一六集会他、ハベージ。

●六・一六集会について。

●議員三名流動的ながら今のところOK。

●宣伝用ビラや電話作戦でP・Rしよう。

●運動の提案については煮詰まらず次回持越、担当は大嶋さんに。

(石川 由紀)

△六月十日▽

★報告事項

●六月八日(金)に文部大臣と会見。署名を一一〇〇〇名分を渡す。

文相の本音としては、現在の家庭一般女子のみ必修は差別と思っていない。女子のみ必

が、中学校はどうなるのかという質問に対し、「あまり広げないで、という意味からだ、家庭一般をやっていく時、どうしても中学校にもかかわってくるだろう」とのこと。

新教育課程の早期実現に対しては、「簡単にはできない」と。

課長「実践例や意見書をどんどん出して下さい。委員の方にお渡しします」とおっしゃった。

実践例、意見書、どんどん出しましょう。そして、実態を知ってもらいましょう。

NHKニュースの窓で

菅谷 薫

六月四日、NHKお屋の番組「ニュースの窓」のタイトルは、「男女で学ぶ家庭科」でした。解説されたのは東浦めいさん。聞き手のアナウンサー(女性)の方も、このテーマについてよく理解されていて、男女平等社会にむけての国際的潮流の中で、そして子どもや家庭の現状をふまえて、現行の家庭科の問題点が、きちんとわかりやすく説明されていました。

修が条約の批准の妨げになっていない。など、まだまだ各方面からの働きかけが必要。

★協議事項

●六月十六日(土)の集会について

1.衆議院議員江田五月氏の話一時半から。

2.経過報告は、各地の動き、牧野さんの報告、文部大臣との会見について話す。

3.これからの運動の提案について(大嶋さん)

●署名運動をこれからも続ける。

●集会で承認された要請文を検討委員へ送る。●各政党、国会の国連婦人の10年議員連盟へも要請文を送る。

●マスコミへの働きかけを強める。

●各地のいろいろな集会でアピールする。

(八島 紀子)

△六月十六日▽

六・一六集会のあと世話人の全国交流会とすることで予定していましたが、遠方からの参加者は残念ながら少数でした。

集会のあと各地からの参加者といっしょに目黒の駅ビルで夕食をとり、泊りこみで深夜まで話し合いました。

はじめに、アーニ出版からの依頼で、会員の北沢杏子さんがつくられた「妊娠・出産」というスライドの教材を見て意見を出し合いました。

内容のあらましは、次の通りです。戦後の家庭科は、男女共に責任をもって家庭生活を創ることを目標として発足した。しかしその後、家庭責任は女子にという従来の考え方が再び強まる中で選択から女子のみ必修になった。そして国連婦人の十年という動きの中で、家庭科を男女共にという声が高まる中で、文部省は、校長会や家庭科の教師の中にもある「家庭科は女子の教科」という考えや、男子に教えたくない意識をバックに、女子必修を継続してきた。今、差別撤廃条約の批准を目前にして、文部省も見直しを決意した。家庭や家族の現状を考えても、生活をする力をつけ生き方を学ぶ家庭科は、男女共学んでこそ意義がある。実際、都立高校で、男女で学ぶ選択「食物」を見学して、以前は選択でもよいと考えていたが、共修で学ぶことが大事だという思いを新たにした。共修家庭科の内容の検討がこれからの課題である。

東浦さんに、私の普段のままの授業をお目にかけた私は、東浦さんの話を聞いて、京都や長野等の共修「家庭一般」の授業を御覧になれば、誰でもが共修の意義をよくおわかりになることと思いました。

最後に、この番組のビデオをとってありますので、見たい方はご連絡ください。

次に、六・一六集会について話しました。

★集会の感想

●議事録の説明は勉強になった。

●報告も会場発言も充実していた。

●運動のすすめ方についての議論がもうひとつ盛り上がりなかった。

●資料がよかった。

●人数が少なかった。

●テレビが2局も来て嬉しかった。

★なぜ雪の二・二一集会より参加者が少なかったか

●タイトルのせいかな？

●集会が重なった。

●学校が忙がしい時期だったことが大きい。

●いよいよという時になって用心深くなる人もある。今動くと思立ってしまった。

●現状とあまり変らないだろうという情報の流れ、へたに動くなと言われている。

●まだ一般の関心はうすい。臨教審などの方に関心がある。役割分業に賛成の人も多く、一般にはかえって役割分業意識が強くなっているのではないかな。

★もっと一般の人にうったえるには？

●会報や資料をもっと大勢に送っては——財政的にむり。

●新しい資料をつくっては？

◆性別役割の問題よりも日本の家庭や社会の
状態から共修の必要を説いた方がいい。

(この点についてはもっと議論が必要なの
うです)

★各地で検討会議委員と連絡をとっているこ
との報告

長野——西山さん 愛知——藤井さん

大阪——麻生さん

佐藤慶子さん——間宮さん(大学の縁で)

★決めたこと

◆新世話人に鳥取の本橋靖子さん。

◆要請文を十八日に届ける。

◆号外発送のだんどり。

(梶谷 典子)

国際婦人年日本大会の 決議を実現するための

連絡会報告

和田 典子

一、中学・高校家庭科の見直しに関する申
し入れ

5・28の全体会で、文部省に対して左記の
申し入れをすることをきめ、6・15午前中、
中村代表世話人は6団体の代表が同行して、

森文相と面会して、要請しました。

1. 検討会議委員には「連絡会」より複数
の代表を加えること——(これに対して文相
は、運動家を加える意志がないと表明)

2. 見直しに当っては「条約」第10条(b)項
だけでなく(c)項の精神をふまえること。

3. 家庭科及び技術・職業教育を、中学・
高校で男女共学必修とすること。

二、スエーデンの雇用平等法と現状につい
ての講演を、平等オンブズマン、トーネル女
史より6・15、参議院議員会館できました。

三、「機会均等法案」について、七政党の
意見をきく会が、6・15日午後、左と同じ会
場でひらかれ、満員の盛況でした。野党五党
は反対、与党は成立させる意向でした。

お願い

編集部

△署名をもっと集めましょう△

文部大臣あての共修を要請する署名活動は
引き続き行います。用紙は事務局にご請求
ください。

△リーフレットのご利用を▽

ピンクのリーフに続いて、同封の「男から
男たちへ」をつくりました。男性にうったえ

るためにご利用ください。

△投書を▽

各紙の投書欄のあて先を同封しますので
ひよろしく。

△各集会でアピールを▽

夏にはさまざまな集会が開かれます。教育
問題、婦人問題等の集会に積極的に参加して
アピールし、できれば各地で独自の集会も開
いていただきたいと思います。大きな集会と
しては、次のようなものがあります。

◆7月28・29日 母親大会全国大会(東京で)

◆8月5・6日 全国PTA問題研究会(全
P研)東京大会

◆8月18・19日 全P研全国大会(大阪で)

特に次の集会には積極的に働きかけたいの
で、出席できる方は事務局にご連絡ください。

◆8月24・25日 日本PTA全国研究大会

(青森で)

◆8月25・26・27日 全国高校PTA連合会
全国集会(鹿児島で)

家教連夏期研究集会は7月30日〜8月1日
(2泊3日)、男女共修の本場、長野で開催
されます。会場は中軽井沢塩壺温泉ホテル
参加費は四〇〇〇円(宿泊予約金三〇〇〇円)
問合せ先〓〇三・四六六・二六六五和田典子